

新文學全集(1)

大岡昇平集

大岡昇平集

新文學全集

河出書房

大岡昇平集

新文學全集 第一回配本

昭和二十七年九月二十日 初版發行
昭和二十七年十月十日 再版發行

定價 一三三〇圓
地方賣價 二四〇圓

著者 大岡昇平

發行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 永井直保
東京都中央區入船町二ノ三

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

電話神田(25)三一七四番

永井印刷・加藤製本

目次

俘虜記

三

歩哨の眼について

三

海上にて

三

俘虜演藝大會

四

わが復員

五

妻

七

母

九

一寸法師後日譚

102

來宮心中

111

武藏野夫人

115

年譜

115

裝幀
脇田和

俘虜記

わがこゝろのよくてころさぬにはあらず

歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四國の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二ヶ中隊、海岸線に沿つた六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行ふのみである。

私の屬する中隊は昭和十九年八月以來、島の南部及西部の警備を擔當した。中隊本部は私を含む一ヶ小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊はそれぞれ東南ブララカオ及び西北バルアンにあつた。サンホセ、バルアン間、つまりこの島の全長を蔽ふ約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けてゐた。しかし彼等は攻撃しては來なかつた。

昭和十九年十二月十五日米軍は艦船約六十隻をもつてサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はまだこの地の上つてゐなかつた

が、彼等はサンホセの砲聲を聞いて、いち早く糧食、無線機と共にこゝに退避してゐたのである。糧食はなほ豊富であり、まもなく我々と合流した附近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ總員約二百名、なほ三ヶ月以上を支へ得る筈であつた。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散する迄、我々は約四十日こゝに露營した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては來なかつた。「奴等は怠け者だからこんなところまでやつて來やしないさ。そつちが來なけりやこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだらう」と我々の當分の宿舍となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいつたが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にちつとして居れば、戦は我の上を通過して、こゝは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々の様な孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかつた。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命を受け、度々十數名より成る斥候が組織され、十日或ひは一週間サンホセ附近の山中に潜伏して歸つた。或る時彼等は米哨兵に發見され射撃された。

まもなく一ヶ小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して

分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見たる狀況を大隊本部に打電した。彼等は屢々數十隻より成る船團がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多數新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操つて魚を釣つた灣内には、米機外艇が引掻いた様に白い水脈を引いて縦横に疾驅してゐた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼等の到着豫定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸して居り、彼等を乗せた舟艇は以來行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考へられてゐなかつた。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもつて上陸した米軍に對する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持つてゐなかつた。

しかし我々はその後も命令により幾度かブラカオに出張し、或ひは到着してゐるかも知れぬ斬込隊を迎へに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに来た不運な住民を拉致して歸つた。かうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩される原因を作つて行つたのである。

かうした絶望的狀況にあつても、我々兵士は比較的呑氣であつた。我々は盡くその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後直ちにこゝへ送られた補充兵であり、經驗の缺除から事態の重大さがピンと來なかつたからである。しかしい

くら正確に事態を認識したからといつて、いつ來るかかわからぬ壓倒的に優勢な相手を毎日氣に病んでゐられるものでもない以上、かうした無智は我々にとつてむしろ一種天與の恩恵だつたといふことも出來ようか。我々は大部分私の様な三十を越した中年の兵士であり、目前の事態から強ひて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それにこの山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかつた。氣候は既に乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみ着のまゝの露營生活には丁度手頃な陽氣である。糧食も差當つて不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのづから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンブにでも來た様な氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の山山人（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い異人種で、戰爭に無關心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を與へて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々は時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやつて來た。マラリアである。ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの發生する島ださうである。しかし豫防薬をとつてゐたため、サンホセにゐる間は患者は二三名を越えなかつたが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したため、やがて急速に蔓延し、一

月二十四日米軍に襲撃された時、立つて戦ひ得る者三十人を出なかつた。最後の半月の間には大體一日三人づつ死んで行つた。

病人は靜かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その呑氣な日常と異様な對照を示してゐた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充滿してゐる病人を眺め、黙つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いてゐた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしてゐるから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局かうして病人が増えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判斷にはルソン島を不落の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれてゐた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的豫測を抱懐し得た筈はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰氣で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をなし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れてゐた。私は彼の體にその僚友の死臭を嗅ぐ様にさへ思つた。

「警備隊は警備地區をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつてゐたが、私は彼が通り一遍の訓示を行

つてゐたとは思はない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を與へ放ち歸らしめた。彼の言動には常に一種の諦めがあり、彼の動作はいはゞ過度に緩慢であつて、時々齒の間から押し出す様に弱く笑つた。犠牲者の笑ひである。

彼は幾分進んで死を求めた様である。サンホセ駐屯中行つた討伐戦において、彼は常に先頭に立つて戦ひ、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自らに課することを許しながら、それを部下に課することにについては自己の責任を感じずにはゐられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等は一般にたゞ自己の死によつてしか、その部下に對する要求を正當化する手段を持つてゐない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火點觀測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて最先に戦死した。恐らく本望だつたらう。

一種の共感から私はこの若い將校を祕かに愛してゐた。私もまた私なりに彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自己の確實な死を見詰めて生きてゐたからである。

私は既に日本の勝利を信じてゐなかつた。私は祖國をこんな絶望的な戦に引ずりこんだ軍部を憎んでゐたが、私がかこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、今更

彼等によつて與へられた運命に抗議する権利はないと思はれた。一介の無力な市民と、一國の暴力を行使する組織とを對等に置くかうした考へ方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に驅り出されて行く自己の愚劣を嘆はないために、さう考へる必要があつたのである。

しかし夜、關門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下方を動いて行く玩具の様な連絡船の赤や青の灯を見て、奴隷の様に死に向つて積み出されて行く自分の惨めさが肚にこたへた。

出征する日まで私は「祖國と運命を共にするまで」といふ觀念に安住し、時局便乗の虚言者も空しく談ずる敗戦主義者も一繋げに嗤つてゐたが、いざ輸送船に乗つてしまふと、單なる「死」がどつかりと私の前に腰を下して動かぬものに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はあり、別れは實際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にゐるといふ事實によつて、確實に過ぎ去つた。

未來には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虚無であり、そこに移るのも、今私が否應なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思ひも思ふことがあらう。私は繰り返しかう自分にいひ聞かせた。しかし死の觀念は絶えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、たゞ確實な死を控へて今私

が生きてゐる、それが問題なのだといふことを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る處死の影を見ながら、私はこの植物が動物を壓倒してゐる熱帯の風物を眼で貪つた。私は死の前にかうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思はれた。かうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確實なしるしであると思はれた。

しかし、いよいよ退路が遮斷され、周圍で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な變化が私の中で起つた。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確實な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する氣になつた。少なくともそのために萬全をつくさないのは無意味と思はれた。

明らかにこれは周圍に濃くなつて來た死の影に對する私の肉體の反作用であつた。かうした異常な状態にあつて、肉體が我々をして行はしめるものは頗る現實的であるが、その考へさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。それはSといふ或る漁業會社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつてゐた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として

戦ふことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切つてゐた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦つてゐると判断し、「こんな戦場で死んぢやつまらない」と思つたといふ。

この言葉は私にとつて一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思ひ當つた。こんな邊鄙な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、單に「つまらない」たゞそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計畫を立てた。その計畫とはかうである——いづれ我々が米軍によつて現在地を逐はれるのは確實として、何とか敵中を潛つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島傳ひにボルネオに運れる(この際私が海水浴場で覺えた帆走術が役立つ筈であつた)。私はボルネオも安全とはいへないから、いつそ南支那海を突切つて佛印に渡つてはどうかと提案したが、Sはそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつた場合、我々は再び山に籠り、草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は子供の時讀んだ「ロビンソン・クルソー」の細目を語り合ひ、土民から竹から火を起す方法を學んでおいた。

この計畫はいかにも空想的なものであるが、我々はその

實現の可能性を少しも疑はなかつた。

我々は繰り返してこの計畫を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足の様には快活だつた。(我々は實際墓穴を掘つた)我々はまた當時我々の最も身近な敵、マラリアに罹つた場合を考慮し、現在残つた唯一の對抗法、つまり豫め體力を貯へることに全力をあげた。我々は病人の残した粥を食へ、土に落ちた飯粒も拾つて食へた。

しかし我々はいかにしてあらゆる場合に備へて周到に計畫してゐたにも拘らず、我々がマラリアで發熱してゐる丁度その時、米軍がやつて来る可能性については想到してゐなかつた。

二人共申し合はせた様に一月十六日に發熱した。私は四十度の熱が續き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。Sの症状は私ほど重くはなかつたが、やはり毎日三十九度以上の熱が出た。

最初の試煉が來たのである。私は心に「武器を取れ」と叫んだ。私の體は強健ではなかつたが、病に對しては比較的抵抗力があるのを知つてゐた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まつたのを見て、消化器に無益な負擔をかけないために(これがその時の私の考へであつた)一切食べないことにした。半月位食へずにも、體力を維持するだけのエネルギーを貯へてあると私は自負してゐた。

衛生兵は山へ入つてから奇妙なマラリア療法を發明して

みた。それはマラリア患者は水を呑んではいけないといふのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、斷乎として反對した。あらゆる論據をあげて、その禁止の無意味なることを證明して見せた。分隊長は怒つて兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待つてひそかに頼み、或ひは自分で十間ばかり離れた泉まで匍つて行つて水筒に水を入れた。

私は死がマラリア患者を急激に襲ふのに氣がついてゐた。私は絶えず自分の體の狀態を監視し、まだ死に、いないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを見て、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍ひ出して小便をして見た。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。死體は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であつたから、比較的軽い病人が土葬を手傳はねばならなかつた。長らく發熱してゐて少しよくなつたと思はれた一人の兵士が、死人の装具を一丁ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。歸つて小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪んでゐるのを認めた。翌朝彼は死んでゐた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方發病後初めて少量の粥を攝つた。その時展望哨が米船三隻がブララカオ灣内に入るのを見たと傳へられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか歸らなかつた。歸つ

ても不機嫌に横になつたときり何もいはなかつた。我々は通りすがりの兵士から直ちに四名の斥候が出たといふことを聞いた。

翌朝眼がさめて小屋の周圍が何事もなく明るくなつてゐるのを、不思議な氣持で眺めたのを憶えてゐる。私は漠然とその拂曉米軍が來るか考へてゐたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は歸らなかつた。夜私は分隊長に「今日米軍が來なかつたところを見ると、僕達は包圍されてるんぢやないでせうか」といつた。彼は「病人の癖に生意氣いふな」といつた。

次の日は一月二十四日である。この拂曉また一組の將校斥候が出た。七時頃一人の兵士が歸つて、一行は麓で襲撃され、將校は戰死したと傳へた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ歸つて、病人は非戰鬥員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は支度しろ、といつた。そして彼自身も支度をはじめた(彼も少し前から病人と稱してゐた)。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで恢復してゐたが、分哨まで十五軒の道は自信がなかつた。その先またどれだけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がこゝで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残つた。Sは行くつもりらしく支度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の周りを歩きながら、

彼に改めて「俺は残るよ」といった。

彼も大分よくなつてゐた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行くかう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一緒に気がなつた。私は分隊長に決心を變へたことを傳へた。彼は黙つてゐた。各自押し黙つて支度をした。別れの言葉は交されなかつた。

出發の時になつた。私が皆に隨いて歩き出さうとする時、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ない様にしたがら「大岡、残るか」といった。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏ひになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答へ、銃を下した。

Sは何故かこの時先發して私の見えないところまで上つてゐた。その時の状況では彼を呼び返す氣は起らなかつた。かうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいはずに別れてしまつたのである。

この退避組は全部で六十名餘りになつたが、二軒ばかり行つたところで襲撃されちりぢりになつた。米軍はこの時既に完全に我々を包圍してゐたのである。Sはその晩まで分隊長と一緒にゐたが、翌朝落伍してゐたさうである。(かうしたことを私は後で私と同じ俘虜收容所に來たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士と共に一ヶ月ばかり山の中をさまよつた場合比島人に捕へられた。彼はその

手に残つてゐた手榴彈を投げなかつた)

残つた者の取るべき行動については、何の命令も與へられてゐなかつた。兎に角各自靴を穿き、脚絆を巻いて戦闘準備をして横になつた。

私はこの時分隊で一番重い病人であつたから残るのは當然として、他の三人が出發した連中と比べて、特に悪い状態にあるとは見えなかつたのは意外であつた。

一人はKといふ有名な大正の講壇批評家の息子で會社員であつた。彼は常々命令された最少限度を行ふといふ頗る消極的な勤務振りを示し、上官の受けはよくなかつた。Kといふのは珍らしい姓であつたから、私は或る時彼に「君はK先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類ぢやねえ」と囁んで吐き出す様になつた。それは「親類ぢやねえ、赤の他人だ」とは受け取れない妙な返事だつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が氣に入らなかつたから追求しなかつた。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の發熱をした時、彼も足を傷めて班内にゐたが、飯盒に水を汲んで來て丁寧に私の頭を冷やしてくれた。その看護には女のような奇妙な優しさがあり、彼の不斷の人に馴れないエゴイスチックな態度とは似合はなかつた。私が前の質問を繰り返すと彼は素直に次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死を遂げてから後の一家の歴史を細々と語つた。以來我々は友人となつた。しかし彼は私とSの脱出計畫を冷笑してゐた。

彼ははつきりしたマラリアの症状を示さず、假病ぢやないかといふ者もあつた。少なくとも出掛けたSよりは遙かにいゝ状態にあつたことは事實である。彼は口を曲げて「行つたつて残つたつて同じことさ」といつた。彼は心は優しいが幾分自分を粗末にする男だつた様である。

他の一人は土木師だつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、屢々上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者として嫌つてゐたが、山へ入り最早序列も昇進も問題でなくなつた後にも、彼は依然としてよく働き、進んで重い物など擔いだ。そして恐らくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの齡になつてもまだ人を見る眼に誤りがあるのを秘かに愧ぢた。彼はもう熱はなかつたが、多分體が見掛け以上に弱つてゐたのであらう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはつきり意志表示をせず、たい皆が出掛けた後で、見たら彼がそこにゐたといふにすぎない。彼はベそをかいた様な顔をして、脚絆も巻かずに壁に向いて寝てしまつた。

時刻は殘留者が誰も時計を持つてゐなかつたのではつきりしたことはわからない。私は通りがかりの兵士に飯盒に水を汲んで来て貰ひ、何度もそれを水筒に詰めようとして、つい億劫で止めたのを憶えてゐる。物音はなかつた。兵士もだんだん通らなくなつた。

突然、我々の小屋のあつた谷の下の方から三發の鈍い發

射音が聞え、少し間をおいて中隊本部の山の上で三發の澄んだはじける様な音がした。

それは小銃の音ではなかつた。私はそれまで迫撃砲の音を聞いたことはなかつたが、何故かこの時それを迫撃砲ときめてしまつた。しかもそれは彈着を見るための試射の音である様に思はれた。

皆起き上つた。表情のない顔だつた。「來たらしい——兎に角上まで行つて見ようか」と私はいつた。皆「うん」と答へて身動き始めた。

私は飯盒の水を水筒に移さうとした。手が震へて水は外へこぼれた。私は「死ぬのには水は要らねえや」と呟いて飯盒を遠く投げ飛ばした。

私の友人は屢々私が何事にも見切りがよすぎるといつて私を非難したが、私が今日生きて歸つてこんな文章を書いてゐられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたといふ一事に懸つてゐる。

私はなるべく身輕に身をこしらへ彈入も一個しかつけないで外へ出た。その時の私の感じでは、私の生命はその三十發を射ち盡すまでは持たないのである。

他の三人はまだ中でごそごそやつてゐた。私は中隊本部まで一町の坂道も上れるかどうか自信がなかつた。私は「先へ行くぜ」と聲をかけて歩き出した。

「一緒に行かないのか」とKが不服さうにいつた。私は「歩けるかどうかかわかないから、先に行くよ。多分途中

で待つてゐる」といひ棄て、銃を杖に狭いジグザクの坂道を上り始めた。これがこの連中の見收めとなつた。なほ身ごしらへに手間どつてゐた彼等は、一人もこの米軍の砲撃正面となつた谷から出られなかつた。

私は不思議に歩いて途中休みなしに上り切ることが出来た。上ではみんな活潑に動いてゐた。二三人づつ隊伍を組み緊張した顔を連ねて無言で右左に摺れ違つてゐた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋に入つて腰を下した。二三人の病兵が銃を抱き顔を歪めて横はつてゐた。

途端に小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て弾の来る方角へ伏せた。今私が上つて来た谷の方角である。炸裂音は續いた。「前へ出る、前へ出る」といふ聲が聞えた（この時私のゐた位置から十米後方の衛兵所に弾が落ちて一人の兵士が大腿骨を碎かれたのである）。私は匍つて前へにじり出た。炸裂音はなほ前方で激しくしてゐた。私は前進を中止した。「前へ出る」の聲は續いてゐた。

中隊長が出て来た。彼は鐵兜を背負ひその上から上衣を羽織つて僂儂の様な恰好をしてゐた。彼は笑ひながら「賑やかでいゝぢやないか」といつて双眼鏡を持ち添へ、彈の来る方へ映畫の畫面を横切る人の様に歩いて消えた。これが私が彼を見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せてゐた。私は隣りの兵士と顔を見合せた。その顔は熱病患者らしく蒼くふくれてゐた。その顔も笑つてゐた。

彈はまた一しきり激しくなつて依然前方に落ちた。それから止んだ。

「隊長殿がやられた」といふ聲がし、「衛生兵」と呼ぶ聲が續いた。（この衛生兵も後で收容所で會つたが、彼は中隊長の死體を見附けることが出来なかつたといふ）

先任軍曹が来て、「病人は谷に降りろ」といつた。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病人を促がした。彼等は私が最初入つた時と同じ姿勢で寝てゐた。そして聞えるのか聞えないのか身動きもしなかつた。

我々は私が登つて来た谷とは反対側の谷へ一列になつて降り始めた。病人でない者も皆降りた。私の前には先任軍曹が歩いてゐた。「隊長殿がやられた」といふ聲がまた聞えた。私は私の前に何の反應を示さずに動いて行く軍曹の背中を不思議な生物を見る様な氣持で見續けた。私は「軍曹殿、隊長殿がやられたさうですが」と注意したが、軍曹は振り向かず「さうか——ほんたうかなあ」といつて、なほも歩度を緩めずに歩き續けた。

谷を下りた所に別の軍曹が腰掛けてゐた。先任軍曹は傍へ行つて「隊長殿がやられたつていふんだが、ほんたうかなあ」といつた。「ふーん、ほんとかなあ」鸚鵡返しに別の軍曹が答へた。私は彼等の會話を聞くに堪へなかつた。私がおそを離れようとする、「みんなあそこへかたまつて命令を待つてろ」といつて、谷の向うの空地を指さした。

そこには既に三十人ばかりの兵士が集つてゐた。病兵が

道傍に倒れてゐた。或る者はうつ伏せに死んだ様になつて倒れ、或る者は銃を横に抱いて「く」の字形に寝てゐた。右手は彈倉に當てられ彈を押し込まうとして力を失つてゐた。彈が地上に散らばつてゐた。私はその彈を込めてやり、兵士の體を揺すぶつたが、彼は眼をあかなかつた。

空地に集つた兵士の間に伍長が一人混つてゐた。「命令を待て」といふ軍曹の言葉を傳へると「けつ、命令なんか、待つてゐられるか。俺がうまく逃がしてやるから、みんな來い」といつて一方の道をどんどん上り出した。私は機械的に行つた。上りは辛かつた。私はずつと後れて半町ばかり上り、一息ついてゐると、一行はどやどや引き返して來た。伍長は血走つた眼をして「駄目だ。こつちも撃つてやがる。あつちから行かう。あつちも駄目だつたら、銃座へ立籠つて最後の一戦を交へるまでだ」といひながら摺り抜けて行つた。見知らぬ海軍の兵士が私を見て「しつかりしろ」といひ棄てて續いた。

私はぼんやり彼等の後を見送つてゐた。私はこゝまで上るのに私の力を使ひ果してゐた。私は一緒に行かうか、ついで行けるだらうかと思案しながら、そこに腰を下してしまつた。

一隊はずんずん降りて横へ切れ、林へ入つてしまつた。それはこの谷を少し上つてから別の尾根へ取り付き、先で今彼等が引き返して來た道と合する道である。私はその道を知らなかつた。

また一隊の兵士が足早に空地を横切つて林の中へ吸ひ込まれて行つた。私はその中によく私のところへ身上話をしに來た、或る若い兵士の姿を見た様に思つた。彼もまたマリリアで寝てゐた筈である。その兵士の姿が私にまたついて行く氣を起させた。私は思ひ切つて立ち上り、今來た道を下りて行つた。

空地には倒れた兵士の外誰もゐなかつた。林の中には道はなかつた。前方では兵士等の呼び交ふ聲が響いてゐた。その聲はどんどん遠ざかり、やがて呟く様な音となつて止んだ。その遠ざかる速度は私の到底ついて行けない速度である。

私はまた腰を下した。そして「わかつたよ。もう澤山だ。わかつたよ」と呟いた。(かうして一人になつてから、私は始終聲を出して考へてゐた。恐らく自分の考へを自ら確めるためだつたらう)「わかつたよ」とは「どうせ俺はこゝで死ぬことにきめたんぢやないか。思つたより歩けたからこゝまでついて來たものの、どうせ皆と一緒にには行けないんだ。わかつたよ」といふ意味である。

私は柵に似た大木の根元に身を横へ、おもむろに腰の手榴彈をはづして傍へ置いた。今となつては、これが私の唯一の友であり、希望であつた。その強烈な爆發力は私を苦痛なくあの世へ送つてくれる筈である。

この時私がやがてこの道を來る米軍について何も考へなかつたのは、かなり奇妙なことである。恐らく私は到頭自

分の最後の時に来たといふ考へに壓倒されてゐたのであらう。或ひは漠然と米軍が来るにはまだ間があると思つてゐたのかも知れない。何故なら、さつき伍長がこの道の前方に聞いたといふ銃聲を、私自身は聞かなかつたからである。何の感慨もなかつた。死については既に考へ盡されてゐた。門司を出て以來私の運命はこの一條の線から逃れることは出来なかつた。今その最後の一點に來たといふにすぎない。私は「まづ末期の水を」と呟き、水筒を傾けた。それは空であつた。

私は分隊を出る時水を棄てたのを思ひ出した。その時私は後でかうしてゆつくり水を飲む暇があらうとは思つてゐなかつた。また私は早まつたのかも知れない。私は苦笑した。その時急に渴きがひどくなつた。

私は今自分が存在するのを止めようとしてゐる時、一杯の水を飲むか飲まないかはどつちでもいゝことだと自分にいひ聞かせた。その間にも渴きはどんどんひどくなつて行つた。

附近には水はなかつた。その時私のゐた谷の川は、我々がこゝに來た時既に流れてゐなかつた。そして今は乾季だつたから、ますます干上つて、濁つた水がこゝかしこ水溜りをつくつてゐるだけである。水を飲むには再び中隊本部のある山を越えて、私の分隊の傍の泉まで歸る外はない。しかしその時の私にはそこまで行く力は残つてゐないと思はれた。

私は以前偶然この谷の上流と覺しきところを渡つた時、そこに水があつたのを思ひ出した。その水はたしか黒くなかつた。

私の知つてゐるそこへ行く道もやはり一旦中隊本部まで上るのである。しかしもしそれが事實この川の上流であるならば、この谷を傳つて行けば自然そこへ出る筈である。この道は平坦であり、なほ私の力に堪へさうである。

私は再び手榴彈を腰につけて立ち上つた。そして藪を掻き分けて水のない谷川の川床に降りた。

私は前に今私が生きてゐるのは分隊小屋を出る時水を棄てたといふ一事に懸つてゐると書いた。第一そのため私だけが一瞬の差で米軍の攻撃正面にあつたその谷から出られたのである。第二、さうして水を持つてゐなかつたため、私はこの最初に選んだ死場所を離れた。もし私がなほ暫くそこにゐれば、私は米軍の手によつて完全に私の目的を達してゐた。後で聞いたことだが、翌朝このあたりまで偵察に入り込んで來た分哨の兵は、私が彈をこめてやつた病兵が胸を射たれて死んでゐるのを見た。こゝは米軍の進撃路の一つに當つてゐたから、こゝにゐれば、私は抵抗するしないに拘らず、確實に殺されてゐたのである。

川の水はさらに少なくなつてゐた。十間以上離れて飛び飛びに、一坪ほどの黒い水溜りがあるばかりである。

川に沿つて一條の道がついてゐた。私は機械的にそれを辿つて行つた。渴きは加速度的にひどくなつて行き、一瞬

も我慢出来ないほどになつた。思へば私は發熱以來こんなに長く水を飲まずにすごしたことはなかつたわけである。

私は黒い水を見詰めた。異様な臭氣が立つてゐる私の鼻まで上つて来た。水底に何か黒い昆蟲が匍つてゐた。私はその水を手で掬み口に含んで見た。舌を刺す味があり、呑み込むことが出来なかつた。

大きな水溜りがあり、四五匹の水牛が浸つてゐた。我々がサンホセから荷物を載せて連れて来た水牛である。

水牛は私の顔をいぶかし氣に眺めた。その一頭と私は暫く眼を見合せてゐた。その顔は見れば見るほど人間に似てゐた。私は奇妙な混亂を感じた。水牛ははてれた様に顔をそむけ、一聲鳴いて水からあがつた。水がざぶざぶとその大きな體からこぼれた。その水もやはり飲めない水である。

水牛はさらに川原から岸に上り、林の中へ入つた。氣がつくとそこは兩岸が小さな崖をなして迫り、道は川から離れて今水牛が去つた林の方へ續いてゐた。水溜りの奥で谷は急に曲り先は見えなかつた。

水牛を押し分けてその水溜りを渡つて行く氣にはなれなかつた。私は林に入つた道がまた先で川床に降りるだらうと推測し、その道を辿つて行くことにした。

それは私が降りたとは反對の側、つまり中隊本部のある山の側である。道は上つてゐた。私は最早兩側の枝につきまわりながら歩いてゐた。道はどんどん川から離れ、林が切れて草原へ出た。そしてそこでまた大きく川とは反對の側

へ曲つてゐた。

私はこれが川を遊行する道ではなく、陣地の正面（我々はこゝに陣地といふほどのものを構築してはゐなかつたが、中隊本部の前方半町、ブララカオとサンホセから來る道の合流點に我々の持つ唯一の機關銃を据ゑる銃座を掘り、そこを陣地正面と呼んでゐた。さつき伍長が立て籠らうといつたのはこの銃座である）へ行く道、更に正確にはそこからこの谷へ降りる道であることを了解した。目的の渡渉點へ行くにはやはり一旦その正面まで上り、また私の知つてゐる道を下りて行かねばならぬらしい。

私は再び私の力を使ひ果してゐた。私は目的地の水が果してそれだけの勞力に値するかどうか疑つた。この水の減り様から判断すればその水もやはり干上つてゐると思はねばならぬのではあるまいか。私は林のへりに倒れてしまつた。

前方の草原はさし渡し二十間ばかり、左手つまり谷の側から前面までずつと叢林で縁取られ、右手のみ開いて緩やかに陣地正面に上つてゐた。そこには比島の丘々にあの柔和な夢幻的な緑を與へてゐる、細い長い萱に似た雜草が生えてゐる。

何の物音もなかつた。私がどれほどさうして横はつてゐたか明らかではない。私はやはり自殺を考へてゐたか、渴死してゐたか、明瞭でない。これに續いて私の逢着した一つの事件が、この間それと關係がないあらゆる記憶を抹殺し